



大蘇芳年畫
武田交來錄

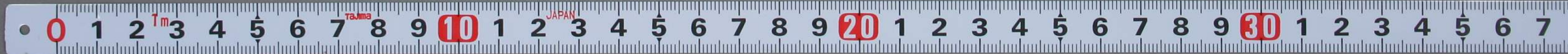
霜夜鐘十字辻篋
あふよのこぶあふよのこぶあふよのこぶ

錦書堂

四編下

四編中

四編上





あふよのろくろおのり
霜夜鐘十字辻篋

錦壽堂棹

四編上



霜夜鐘十

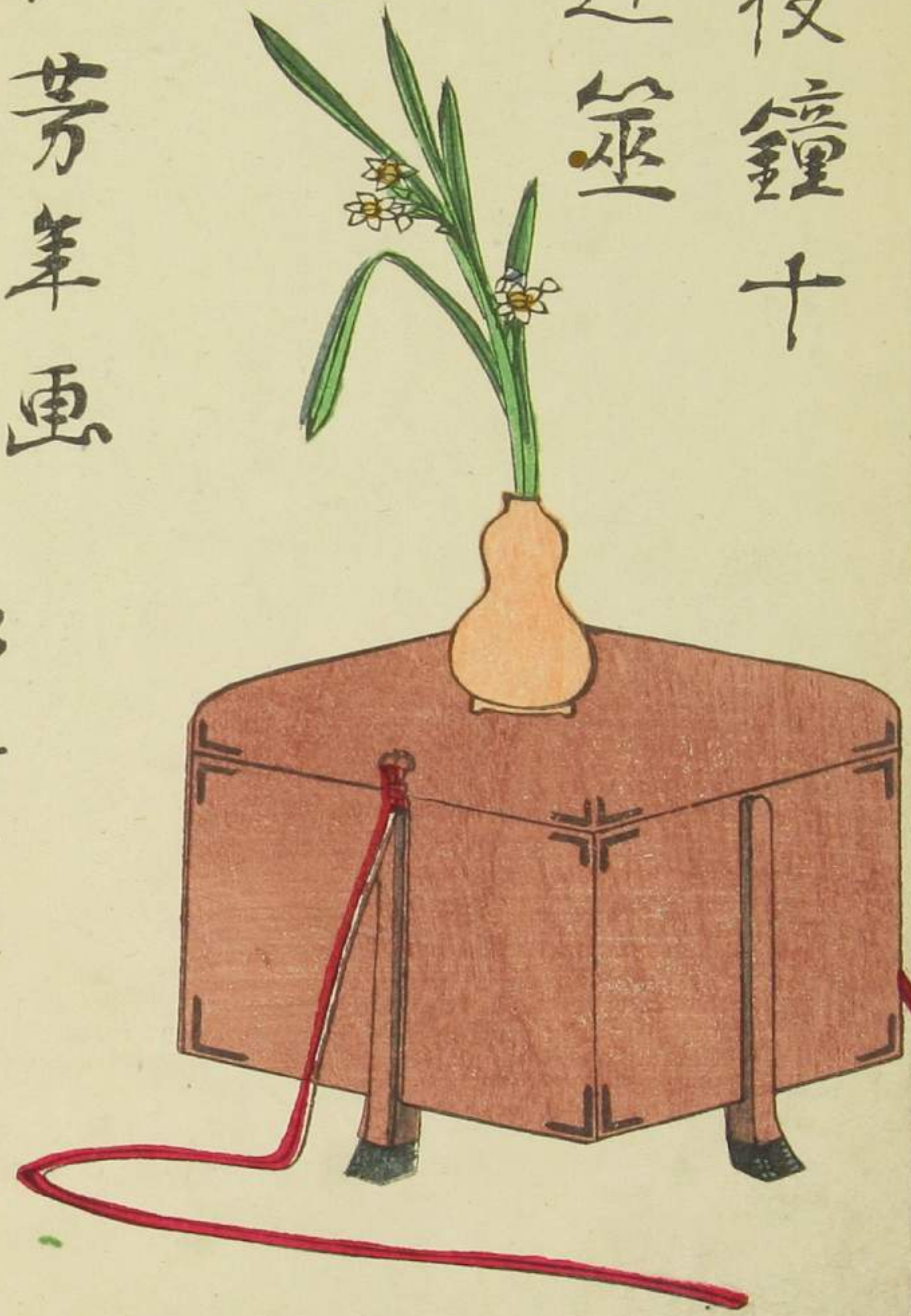
字辻筮

四編

上卷

大廿種芳羊画

錦寿堂様



機小臨と變に應じて利と計る。帝に軍師の上法と名づく。人間
萬事幸福乃。うましく來ると望むが中あり。時勢を穿て狂言
綺語世人情の變に應じて其水子が奇計を見せ楠公の
故を温ねて新富座當りとがきぬ妙案に鳴渡りたる脚色と
其ま霜夜の如く魁の功名を得し此合巻他への敵もたなき
男時ふゆめたる大商利交來子が臨機の方畧その圖に能く中
しと喜ぶあまより我知らば。たたくあや横合う。爰へ驅出しハッ申し
上ます兼て看官お待ごの四編が出来仕り弥々今般賣出しに
付て前編同様益々御高評の程と小生も偏へ奉願上ます

明治十三年十月

芳川春濤題





悪者癩の與七



再出杉田薰

扇石金四



三編のうき

再脱杉田薫

母の病苦を慰めんを磨利
 五天の極目を待て待て極
 と求めてぬり途出通又
 矢もろむを極摩家
 度は彼令助実例され
 石の南ゆて極腹をもち
 船河むむ由附さうし
 漸々はて我か遠り極後
 と押へ落しとさうし
 郡奴小取をさうし
 一人目か命をさうし
 葉の側へまきりコリヤ

▲さうし如極後さうし

家老服を閉ぎ「石丸実
 勝ひ平て極後とさうし
 とさうし「まは浮きさうし
 あつ。さうしへ服を脱ぎ
 「い育人でさうし「育人と
 あつ。さうし「探極後さうし
 の「九さうし「さうし
 さうしの宅へ何れも極後と
 中走「日極寺門前さうし
 と中「ますとさうし
 「家老と中走さうし
 極後杖と笛と忘見はせぬ

○玉がじてまて

分通乃後さうしは假名小
 て家老と記せ「杖と笛と
 輪あさ「たさうし
 小屋二おが「イヤ生二お五方
 面二分署小取あさ「玉上胸り
 あつ。さうし「服を閉ぐヤ生
 かんさるさうし「家老服を
 閉ぎ「玉上服共さうし
 「サ生何さうし
 「極後さうし
 中走さうし

つぎ 鳴きまわらうま 一工をりや外の者
 こころまきや 藤治中おまの羽織と
 令田へい 袴布がええぬお生方のね
 せぬま 只今お中を通るはまきね
 ねい ませぬ 本袴布子小不約合文
 そのまをあり 羽織のね
 生更羽織のね何故
 て生方へ是利
 波 袴を
 羽織の
 十四入
 袴布と
 共小盗
 取ま有りうま 一ト末席

▲所有の袴布と羽織と
 振奪され一夜
 僕が同礼を知らぬと
 あはれは筋へ百連
 うささうあへト

○ 鳴きまわらうま
 天狗小僧金助と
 羽織に袴布を奪
 されは存を助と
 打て今の難儀

盗
 金天狗小
 後の足張りのお
 羽織は是を盗



おきつめ 三日前あふ生方を捕
 捕はて 拘引被せぬ 拘引ますと
 作し方へは若や美若い巡り
 せりのあふ三日
 前と巡
 査と初
 めあつるか多お病お是
 巡りく 疎破はえの士
 族ああり
 うふ今日
 捕縛の権
 へあられと
 獲高友の浦が

逃去り
 何卒お免し
 いらせせ三十
 赦せし生方
 放免して
 せし放物
 ねと生方小十四振奪すは
 四友の浦に生方生十
 四放何程
 難儀
 せせしお知れ
 されははは

免されぬ 一生六浦さふと 一へ



ついでに... 霧夜鐘四上

二筋町ゆへ四幕府の佐士候

途途中で... 霧夜鐘四上

一腰を掛る... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上

お父さん... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上

お父さん... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上

お父さん... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上

お父さん... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上

お父さん... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上



お母さん... 霧夜鐘四上

お父さん... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上

お父さん... 霧夜鐘四上

お母さん... 霧夜鐘四上

お父さん... 霧夜鐘四上

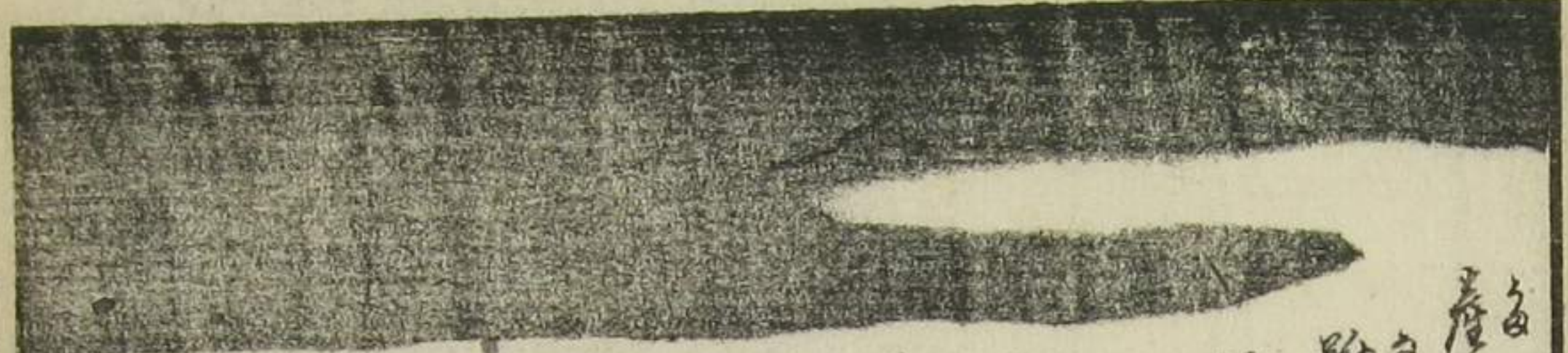
お母さん... 霧夜鐘四上

お父さん... 霧夜鐘四上

つぎ 竹をもち松のね父揃い盗人をぶんどる
 目のおもむいのかよきが欲ごころ
 小徳伏を三毛情の宗助の松の二人の
 お返しは方おのが六浦換
 お返しは方おのが六浦換



これど
 悪い人
 けりま
 儲けの中のみ放
 何れおとじて
 女おどぬ日
 止つ内生十四と
 舞今更あふ
 ぬアアアア
 兄のぐさ
 とすうよう



産ままの
 難儀
 合枝六浦換
 六浦換
 サア
 金助
 天物小僧
 神々合



つる盗人
 外
 ねんき
 形り
 お金
 三強
 くら
 上
 ては
 次へ

悪行七分

署へ出て自首
技し犯せ

罪の

不刑を愛

後所へ来り

舟七情

日夜勉

強行一魚

友わゆ

侍春の



小判心算敷絶お貸り
色て下まをとお送しや

「いりあり
がふせ下米
まろそく
あんん金
さぬのともな
お救を仇お
高依不通
あふせ以
心之身換由
由幼年お教
もあふまを
あふせ想
ぬ事云

お慈悲あて一等

罪を減下らねるは先例のある

りぞ希早六十有路の老年

殊小より急放免小成まじく共

中されぬ連むは怪通さられけり始へ

苦界へ流ぬづともそこの悪事と

自首絞せつらめもそこの

作せし後ひ自首絞しまじ

いそひます ○え松の九十九里の渡り

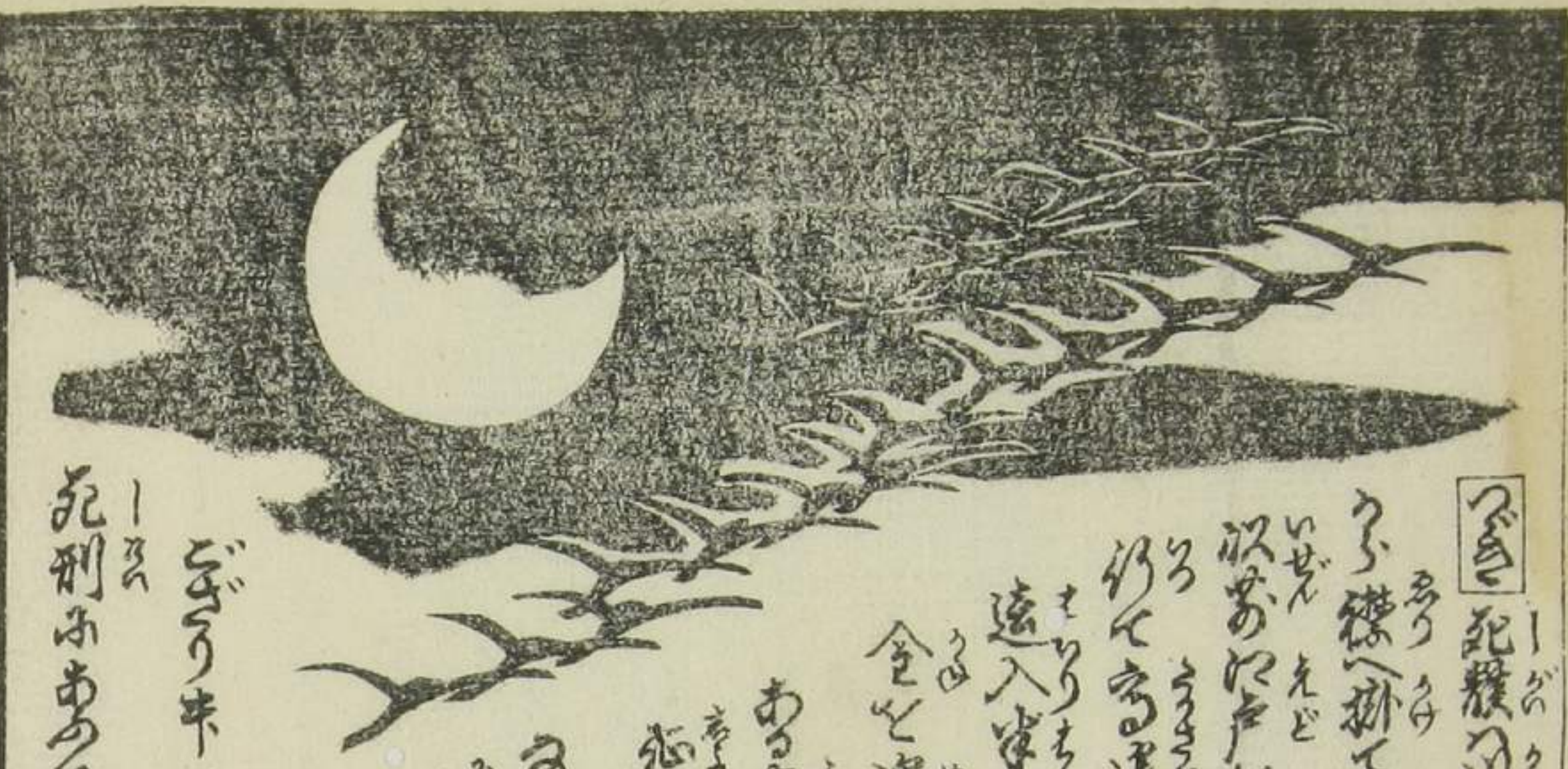
此所の画は
宗菴が物
語の様と
四しる也



の悴てとさり米が産の母ハ
十四五う六浦さあへ
小身小元えまとい候ふ一二夜上り十夜

さぬのともな
お救を仇お
高依不通
あふせ以
心之身換由
由幼年お教
もあふまを
あふせ想
ぬ事云





死骸の川へ打込ははらへし身を
逢ひと生母をぬりて 世に
逢ひと生母をぬりて 世に
逢ひと生母をぬりて 世に

死骸の川へ打込ははらへし身を
逢ひと生母をぬりて 世に

死骸の川へ打込ははらへし身を
逢ひと生母をぬりて 世に

大蘇芳年畫

大日本名将鑑

大錦繪 五拾番續

這ハ神武帝ヨリ寛永年代ニ至ル迄皇國有名ノ大将ヲ選
抜シテ各小傳ヲモ記載シ彫刻摺立等入念美濃ク仕立先
般賣出シ候処御愛顧ヲ以テ各位方ヨリ追々御注文受新版
之分摺立間々合兼発兌延引仕恐入候弥本年十月迄ニ全
版致シ候間不相變陸續御請求之程伏テ奉希上候以上

東京書肆

錦壽堂

船津忠次郎板

神田塗師町二番地





四編中

霜夜の

鐘十字

辻並

大々蘇

笄四編

芳年画

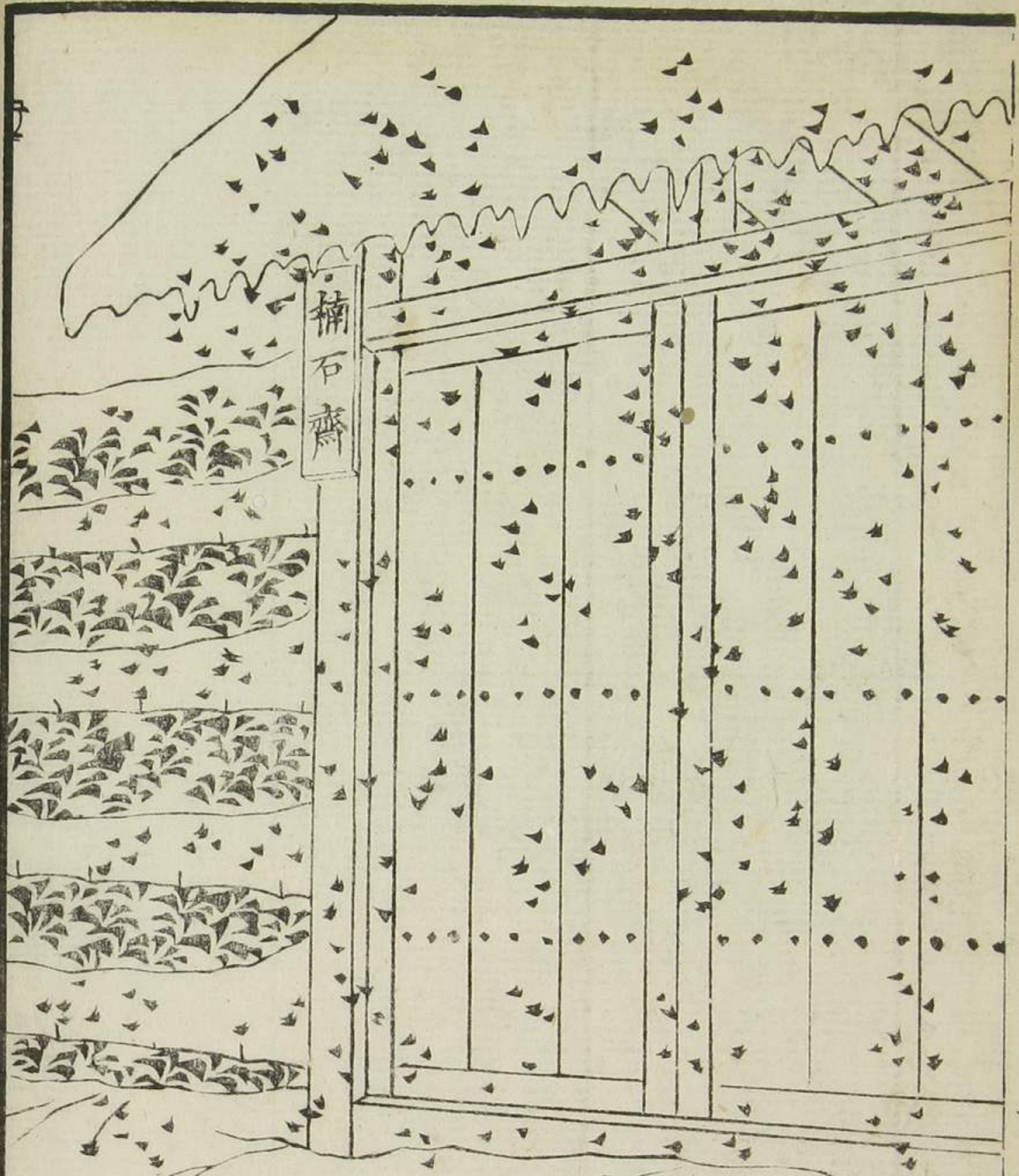
中の巻



錦
文
度

四幕目楠石祇宅の場 ▲ 源後の方へ附て歩行ぬ金「イヤ」玉持由利人登る
 ○異母の根岸の置ふ多も多き ひと疎くも大丈夫か按摩の金 一番内倉の積
 新行の松の行辺り楠石祇が の十田由只一下睨をせして仕舞
 雅と遠くたる下揃へ植の 今日ハ燈籠の玉 吾代ハ仕舞や
 外面小来かへしハ彼の 今更ハ仕舞や
 令助と丹作が 今更ハ仕舞や
 りあひ今ハ 今更ハ仕舞や
 吾来下跡 今更ハ仕舞や
 夕陽碎檄 今更ハ仕舞や
 嫌のふ多 今更ハ仕舞や
 星三ッ兄者 今更ハ仕舞や
 漢ッ端ハ 今更ハ仕舞や
 深き水ハ 今更ハ仕舞や

次へ



のき 懐我を任
多きあへる懐
我は任たが
鼻緒が切き
丹 立てあふ
髪へ突く杖
ト丹他へ生
堀の内のか
除の苔茶を抜
とる令とんは
此の南の寺に
が小筋の鼻
結が切れ目常



此と此門の内にて洋大の吐る髪をき
石袂へのあふる髪をき
△ 何の補
かろあト極へ逃る令
○ 丹 丹他何を交換
○ 丹 丹他何を交換
○ 丹 丹他何を交換

つぎ 世間の苦さあつて身はりの雑談も身と備え次の
 苦よりお嬢あつて出まうお静とん替りまうか
 あり来し「オヤさうぞ
 とごり来し「オヤさうぞ
 のあまをと致しま
 せうとお静は次へきて
 びくき「お嬢あつて何方のとごり
 ます村「チト仔細あつてい官の家へ
 来りて「お嬢あつて何方のとごり
 とあつての且形振らま
 村「エエ且形振らまの且形
 致し「とごり来し村「エエ
 致し「とごり来し村「エエ
 致し「とごり来し村「エエ



お嬢あつて何方のとごり
 あり来し「オヤさうぞ
 とごり来し「オヤさうぞ
 のあまをと致しま
 せうとお静は次へきて
 びくき「お嬢あつて何方のとごり
 ます村「チト仔細あつてい官の家へ
 来りて「お嬢あつて何方のとごり
 とあつての且形振らま
 村「エエ且形振らまの且形
 致し「とごり来し村「エエ
 致し「とごり来し村「エエ
 致し「とごり来し村「エエ

お嬢あつて何方のとごり
 あり来し「オヤさうぞ
 とごり来し「オヤさうぞ
 のあまをと致しま
 せうとお静は次へきて
 びくき「お嬢あつて何方のとごり
 ます村「チト仔細あつてい官の家へ
 来りて「お嬢あつて何方のとごり
 とあつての且形振らま
 村「エエ且形振らまの且形
 致し「とごり来し村「エエ
 致し「とごり来し村「エエ
 致し「とごり来し村「エエ



お嬢あつて何方のとごり
 あり来し「オヤさうぞ
 とごり来し「オヤさうぞ
 のあまをと致しま
 せうとお静は次へきて
 びくき「お嬢あつて何方のとごり
 ます村「チト仔細あつてい官の家へ
 来りて「お嬢あつて何方のとごり
 とあつての且形振らま
 村「エエ且形振らまの且形
 致し「とごり来し村「エエ
 致し「とごり来し村「エエ
 致し「とごり来し村「エエ



左 右 何れも...
 右 左 何れも...
 左 右 何れも...
 右 左 何れも...

必らば...
 必らば...
 必らば...
 必らば...

必らば...
 必らば...
 必らば...
 必らば...



本振とまると作...
 本振とまると作...
 本振とまると作...

本振とまると作...
 本振とまると作...
 本振とまると作...

本振とまると作...
 本振とまると作...
 本振とまると作...

東洋雜記

...

此の天窓へは様々大木とありけり ○いられちや成る幼衆も様々ありけり
 やアかくこトは内森並を度々下りて
 未トしく親方定めてお振もたま
 せうか合くお振さん方小速振が
 有てはさ事おまどさるま
 せんやんの衆相の出合取
 殊お相おいあるおも豆
 りぬ亥の内の雇人
 注てお能せしととわが
 弱きと助る
 赤糸の出立性とを
 親方を合度へ一裏大
 真お移しお振けく

何年か昔とて
 下さるる勢も一杯買を
 仕せせう令何とてのやあつたやとていふ
 ありや強張衝ふ来やア一ねへ移り人々
 元とびりやぐるま井さうとくをさびつて

人がお宿され
 ぬへ出てお遊
 出たやアか
 未トヤ
 未トヤ
 未トヤ



かんやせ金全
 や海より手
 の細つと
 おかアねえろわ
 の旁へ引ぬん
 治ろ赤ホー
 高くあつた
 金引か
 の内の色
 せ出せろ
 おひて
 おま
 ちごま
 入へ知る時ハ人かまどるうう

奉と
 松が中
 未トヤ
 今とお出
 まろお志の用七
 金引入とる麻
 何とてのや
 那の
 一
 一
 一



つぎ物りして逆中へ来る何れもこのつらさの
 様と令伺をせよ
 勝者の下と在るまじ
 押のけく外より
 掛け下
 引開けねば程の上へ
 兼水の大紋附き刀床九
 々々魔柄取らるる様には一箇小致るまじ
 令「ヤあひびね」は「穴」に「穴」に「穴」に
 一日我の補多門を求む成公におまじ
 令「まがや」は家の定個といふは石はせん



二階より懸と懸
 て候我をせ
 人威りの捕出
 立物我とまじ
 仕るるは
 死と厭つ
 我除き兼人形
 とるは

お早の御士多門を求む成公におまじ
 形容を一番威をいふもその虚飾と
 令「まがや」は家の定個といふは石はせん
 内へ一番大事の志を願へ何れが
 迷眼で撥おさせ令「ば」探お成せ
 付ややかつこそイヤを候
 先刻あり陸子に不す
 居を放てた候は候は
 まへ素って春解候さうと世方へ立出候と
 令「まがや」は家の定個といふは石はせん



河所生
 兼水
 の心
 感取
 が候小
 さいら
 令「まがや」は家の定個といふは石はせん

〇さして旅の
 寝床代へ何
 程と申す
 夫が言ふ
 石が石
 妻は何
 経と申す
 梅の口
 由非され
 場の事ハ横方
 の不肖者ハ横方
 の不肖者ハ横方
 〇さして旅の
 寝床代へ何
 程と申す
 夫が言ふ
 石が石
 妻は何
 経と申す
 梅の口
 由非され
 場の事ハ横方
 の不肖者ハ横方
 の不肖者ハ横方



〇さして旅の
 寝床代へ何
 程と申す
 夫が言ふ
 石が石
 妻は何
 経と申す
 梅の口
 由非され
 場の事ハ横方
 の不肖者ハ横方
 の不肖者ハ横方

〇さして旅の
 寝床代へ何
 程と申す
 夫が言ふ
 石が石
 妻は何
 経と申す
 梅の口
 由非され
 場の事ハ横方
 の不肖者ハ横方
 の不肖者ハ横方



栗林録 三十九 栗林録 四十
栗林録 四十一 栗林録 四十二
栗林録 四十三 栗林録 四十四
栗林録 四十五 栗林録 四十六
栗林録 四十七 栗林録 四十八
栗林録 四十九 栗林録 五十
栗林録 五十一 栗林録 五十二
栗林録 五十三 栗林録 五十四
栗林録 五十五 栗林録 五十六
栗林録 五十七 栗林録 五十八
栗林録 五十九 栗林録 六十
栗林録 六十一 栗林録 六十二
栗林録 六十三 栗林録 六十四
栗林録 六十五 栗林録 六十六
栗林録 六十七 栗林録 六十八
栗林録 六十九 栗林録 七十
栗林録 七十一 栗林録 七十二
栗林録 七十三 栗林録 七十四
栗林録 七十五 栗林録 七十六
栗林録 七十七 栗林録 七十八
栗林録 七十九 栗林録 八十
栗林録 八十一 栗林録 八十二
栗林録 八十三 栗林録 八十四
栗林録 八十五 栗林録 八十六
栗林録 八十七 栗林録 八十八
栗林録 八十九 栗林録 九十
栗林録 九十一 栗林録 九十二
栗林録 九十三 栗林録 九十四
栗林録 九十五 栗林録 九十六
栗林録 九十七 栗林録 九十八
栗林録 九十九 栗林録 百
栗林録 百一 栗林録 百二
栗林録 百三 栗林録 百四
栗林録 百五 栗林録 百六
栗林録 百七 栗林録 百八
栗林録 百九 栗林録 百十
栗林録 百十一 栗林録 百十二
栗林録 百十三 栗林録 百十四
栗林録 百十五 栗林録 百十六
栗林録 百十七 栗林録 百十八
栗林録 百十九 栗林録 百二十
栗林録 百二十一 栗林録 百二十二
栗林録 百二十三 栗林録 百二十四
栗林録 百二十五 栗林録 百二十六
栗林録 百二十七 栗林録 百二十八
栗林録 百二十九 栗林録 百三十
栗林録 百三十一 栗林録 百三十二
栗林録 百三十三 栗林録 百三十四
栗林録 百三十五 栗林録 百三十六
栗林録 百三十七 栗林録 百三十八
栗林録 百三十九 栗林録 百四十
栗林録 百四十一 栗林録 百四十二
栗林録 百四十三 栗林録 百四十四
栗林録 百四十五 栗林録 百四十六
栗林録 百四十七 栗林録 百四十八
栗林録 百四十九 栗林録 百五十
栗林録 百五十一 栗林録 百五十二
栗林録 百五十三 栗林録 百五十四
栗林録 百五十五 栗林録 百五十六
栗林録 百五十七 栗林録 百五十八
栗林録 百五十九 栗林録 百六十
栗林録 百六十一 栗林録 百六十二
栗林録 百六十三 栗林録 百六十四
栗林録 百六十五 栗林録 百六十六
栗林録 百六十七 栗林録 百六十八
栗林録 百六十九 栗林録 百七十
栗林録 百七十一 栗林録 百七十二
栗林録 百七十三 栗林録 百七十四
栗林録 百七十五 栗林録 百七十六
栗林録 百七十七 栗林録 百七十八
栗林録 百七十九 栗林録 百八十
栗林録 百八十一 栗林録 百八十二
栗林録 百八十三 栗林録 百八十四
栗林録 百八十五 栗林録 百八十六
栗林録 百八十七 栗林録 百八十八
栗林録 百八十九 栗林録 百九十
栗林録 百九十一 栗林録 百九十二
栗林録 百九十三 栗林録 百九十四
栗林録 百九十五 栗林録 百九十六
栗林録 百九十七 栗林録 百九十八
栗林録 百九十九 栗林録 百十
栗林録 百一十一 栗林録 百一十二
栗林録 百一十三 栗林録 百一十四
栗林録 百一十五 栗林録 百一十六
栗林録 百一十七 栗林録 百一十八
栗林録 百一十九 栗林録 百二十
栗林録 百二十一 栗林録 百二十二
栗林録 百二十三 栗林録 百二十四
栗林録 百二十五 栗林録 百二十六
栗林録 百二十七 栗林録 百二十八
栗林録 百二十九 栗林録 百三十
栗林録 百三十一 栗林録 百三十二
栗林録 百三十三 栗林録 百三十四
栗林録 百三十五 栗林録 百三十六
栗林録 百三十七 栗林録 百三十八
栗林録 百三十九 栗林録 百四十
栗林録 百四十一 栗林録 百四十二
栗林録 百四十三 栗林録 百四十四
栗林録 百四十五 栗林録 百四十六
栗林録 百四十七 栗林録 百四十八
栗林録 百四十九 栗林録 百五十
栗林録 百五十一 栗林録 百五十二
栗林録 百五十三 栗林録 百五十四
栗林録 百五十五 栗林録 百五十六
栗林録 百五十七 栗林録 百五十八
栗林録 百五十九 栗林録 百六十
栗林録 百六十一 栗林録 百六十二
栗林録 百六十三 栗林録 百六十四
栗林録 百六十五 栗林録 百六十六
栗林録 百六十七 栗林録 百六十八
栗林録 百六十九 栗林録 百七十
栗林録 百七十一 栗林録 百七十二
栗林録 百七十三 栗林録 百七十四
栗林録 百七十五 栗林録 百七十六
栗林録 百七十七 栗林録 百七十八
栗林録 百七十九 栗林録 百八十
栗林録 百八十一 栗林録 百八十二
栗林録 百八十三 栗林録 百八十四
栗林録 百八十五 栗林録 百八十六
栗林録 百八十七 栗林録 百八十八
栗林録 百八十九 栗林録 百九十
栗林録 百九十一 栗林録 百九十二
栗林録 百九十三 栗林録 百九十四
栗林録 百九十五 栗林録 百九十六
栗林録 百九十七 栗林録 百九十八
栗林録 百九十九 栗林録 百十

近世文武英雄傳

中本 飯田定一集 大蘇芳年画

鹿兒島征討實記

同 飯田定一集 大蘇芳年画

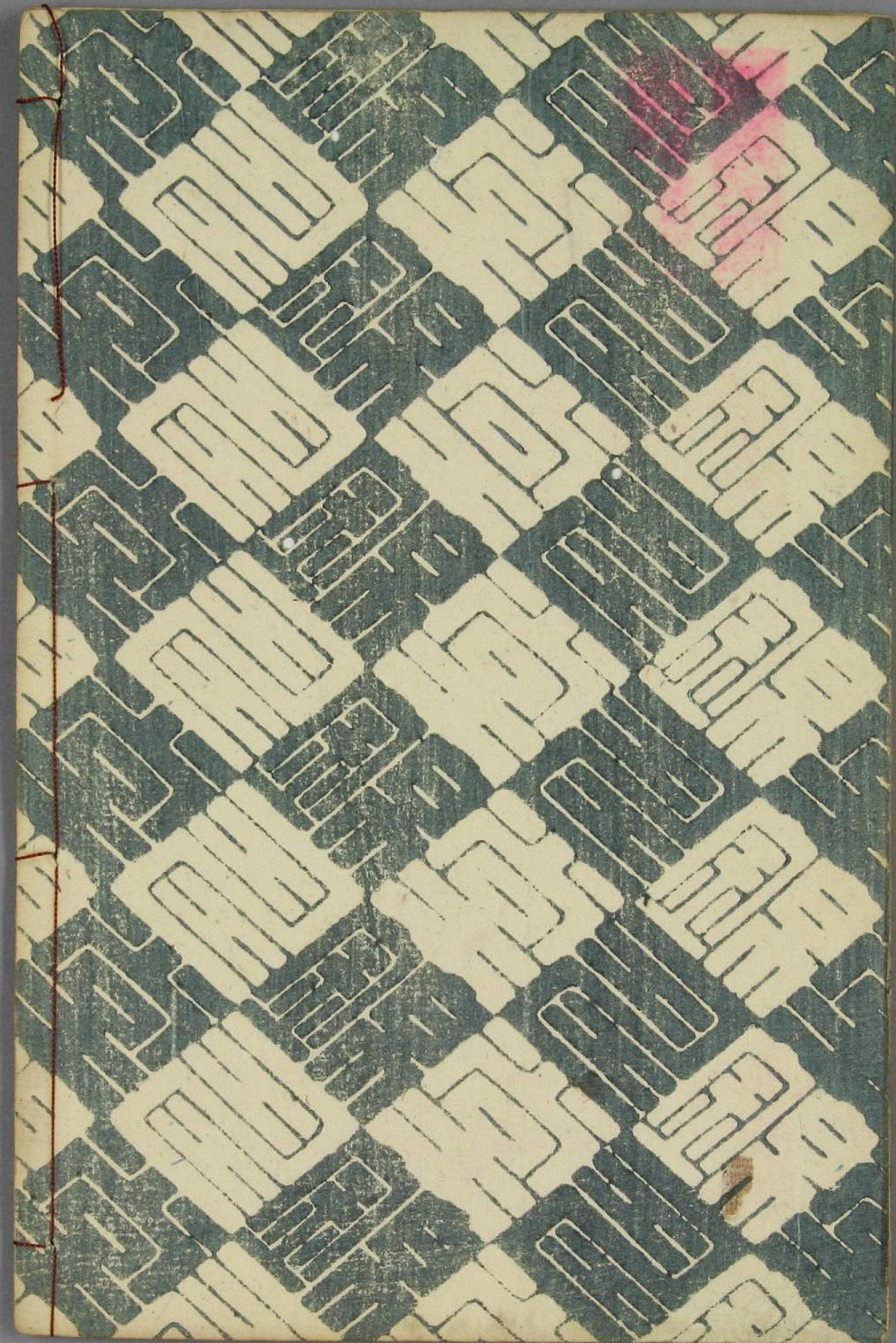
霜夜鐘十字辻筮

從初編 武田交來錄 至五編 大蘇芳年画

冠松真土夜暴動

前後兩編 武田交來錄 ニテ完全 大蘇芳年画

這回ハ江湖小雷鳴しんりやうなる神奈川縣下相模國平塚在の真土村まんどの紛紜まぎらひ近來稀なる憤怒の拳動こぶしどう多年の積惡應報おこなひニテ終小天の冥罰めいばつ免れを義徒ぎとの爲に豪家と絶滅ぜつめつたす勸善懲惡の教戒けんぜんていごの戒めいましめなり



大蘇芳年畫
武田交來錄



四編下



年
画

下の花

花のつむ

十字

縁来中
梓

中之巻分 石 扱いお村がなせー若う村田万車板で
 出合はしと要老をどる米 西のりや京中で強共せん
 道に若い奴らう令 イヤ生杉車板でけぬ新造
 と又小娘の母 旦那何と
 を換えるゆとゆいのが
 令利云々
 ろつてどきする
 おごの夜月
 小由光る差迫い六分五の令
 以智拾ッてきろくろ縁とあり
 空由夜守小海崎の赤花ときひ茶茶で
 夜露小満と生果小一而小遊て星ろと
 又ど考てええりや有女淋ねると

▲助けるとふ更巡査が
 事と散見替められへ大
 妻と悦と由と手して遊
 去のふふふふ
 造次へ

又ど考てええりや有女淋ねると
 造次へ

▲助けるとふ更巡査が
 事と散見替められへ大
 妻と悦と由と手して遊
 去のふふふふ
 造次へ

目次

分署心算と云ふは、密に故九一年二人、懲役の
刑と後中々の相月の上生一年の用敷る何百口
との令を初めと引せし小計案は、お仕起しと云ふ
るのも有りし事、その由をねんを而て見ゆ
ては、方なくおぬけの令書、おぬけを
あてまうとも切と出で、院まひり村町



兄分の何巧は、
切と智
の邪心
と云ふ

月由光えも、その密通さす掛り
且此のおね、おぬけの令書、おぬけを
お方の首で、おぬけと云ふ事、おぬけの
おぬけの世の中、
おぬけの世の中、



おぬけの世の中、
おぬけの世の中、
おぬけの世の中、

氏保護のお廻りおね、
おぬけが、おぬけ、おぬけ、
おぬけ、おぬけ、おぬけ、
おぬけ、おぬけ、おぬけ、
おぬけ、おぬけ、おぬけ、



おぬけ、おぬけ、おぬけ、
おぬけ、おぬけ、おぬけ、

いふ 今日の内はねがはしヤカニやらぬられぬ
 サア実出しへられくト金助あちちと喜笑言
 丹作と金助の金助と引張り技打戸の外へ
 如くと戸せの丹作の金助と金助と引張り技
 まがり丹コレは今日の換ひ給ふまゝ
 口達と銀んごうのねを金 忍敷と
 髭をさきとらと煙草入とせざる
 西河何れでそれと
 板のあしを 喜笑
 ちまかきとてける
 つまやまぬおのねが確小を派
 兄辺んごうがねりか小板ごう
 丹 まがりア今の混雑に幾時足はる

いふ 浮てうられの氣筋も一通り僕が
 先程の河内金手早の里の公士
 公の肖像と名譽の奇巧小彫
 刻を津川の遠拜前と積座
 中へ遺棄させんとあひまよし由適
 当の良巧なまけ打過しが祀後

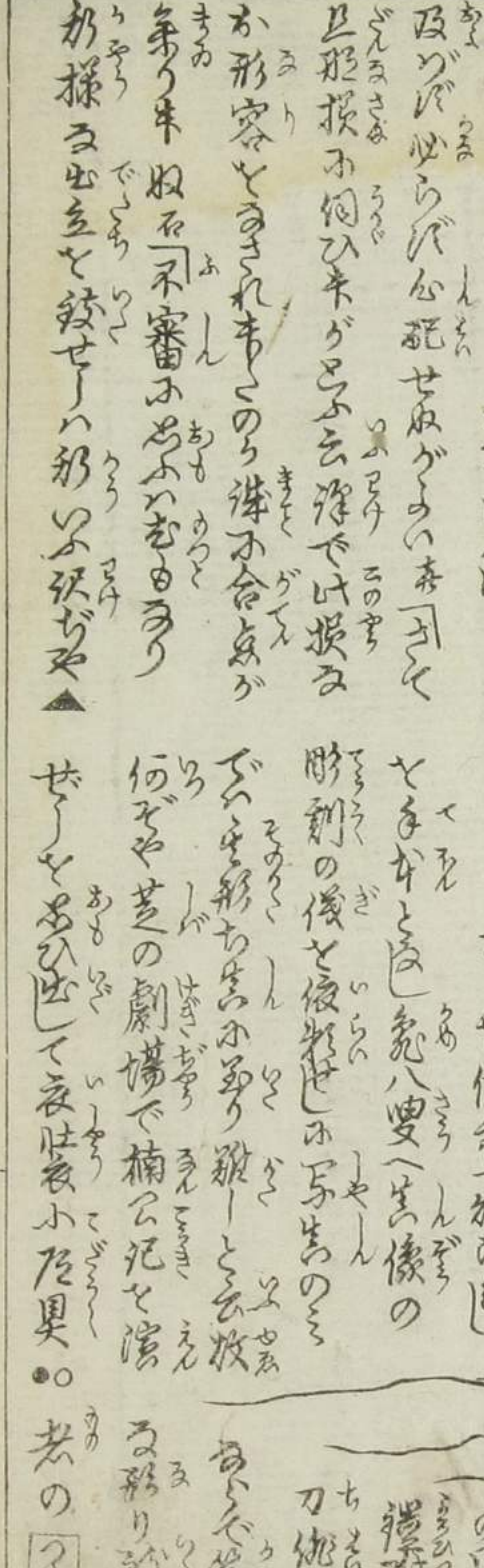
いふ 二入が 礼暴 腹小 田ひ 入へ 刀権儀 丹作方 老の つかへ



いふ 素更のまさるはしをはしをい
 合司の付ねの内海とはやうと
 友人の足あふふをぬりぬく形
 依るまのあふ
 くはこね相法
 の控とあふに
 一回の口と味
 石筋のイヤ依るまの飛の面み
 及び必らひ心託せぬがよの赤
 且形損不伺ひ米がよふ云得ては損
 か形容とよきれもこの得小合と
 糸の手ぬれ不審ふふのむより
 が様と出立と錢せしめがはれが

いふ 彼安本亀八重ハ人の面と浴をか歎く
 写しふ妙と得る放棄小林戸の髪
 よじていふ其公のま
 ① 写しふ取
 ましと僕翁（福の徳）
 とをかとは（龜八重）其像の
 彫刻の後と依れせし写しふの
 といふ形とふふ者一と云放
 何ぞや其の劇場で楠公記を演
 せしむるに衣は長小其具の老の

いふ 二人が 礼暴 腹小 田ひ 入へ 刀権儀 丹作方 老の つかへ



つぎ遊され不審あふ
ゆむゆむぞ花九
あつた
お下ませば
あまの今日
お旗あいら
その考
付ません
依
物おき
旅し有
二階
け發き村



△ 烟入七分
捕さるる
おん
今の
お小
油
ちや
○ 同門外の
より一
由
ほりて
を

葵の岡で候一軍虫も左平記
又栞干の内を心臥馳といふ由



△ 自由
ある
石
楠
豊国のお役者不依

△ 攻寄ねど村
等しき那二人は
で来じも石
進退せの秋
腰の

○ 通六
の
根
葉
の
の
の

つぎ破世(ろくさ)今(いま)小(こ)舟(ふね)と(と)後(あ)ひ(ひ)秋(あ)子(こ)と(と)肌(は)の(の)暗(くら)き(き)
 ねむ(ねむ)ふ(ふ)露(る)も(も)白(しろ)妙(めい)の(の)影(かげ)と(と)目(め)的(てき)小(こ)夜(よ)の(の)さ(さ)の(の)
 ん(ん)細(こ)く(く)も(も)才(さい)を(を)と(と)心(こゝろ)を(を)帯(お)へ(へ)出(い)来(き)り(り)
 雅(みやび)や(や)う(う)が(が)白(しろ)で(で)あ(あ)つ(つ)が(が) 同(どう)下(げ)酒(しゆ)
 根(ね)の(の)裁(ざい)曲(ま)り(り)と(と)老(らう)さ(さ)え(え)た(た)の(の)知(ち)れ
 難(がた)き(き)初(はつ)音(ね)の(の)里(さと)子(こ)夜(よ)の(の)雪(ゆき)指(さし)と
 困(くる)る(る)イ(イ)ヤ(ヤ)圃(ぼ)と(と)し(し)が(が)眼(がん)痛(いた)で(で)
 久(ひさ)安(あ)難(がた)儀(ぎ)被(ひ)世(せ)「(「)二(に)三(さん)日(じつ)」



楠石齋

⊠ 勞(らう)り(り) 門(かど)の(の)お(お) 東(あづま) 仍(なほ) 東(あづま) 七(しち)ト(ト) 正(ただ) 抱(かか) 子(こ) 勞(らう)り(り) 歩(あゆ)む(む) 寄(よ)り(り)

○ 竹(たけ)の(の)縁(えり)縁(えり) 町(まち)の(の)桐(桐)氏(氏)へ 療(りょう)治(ぢ)と(と)迄(まで) 小(こ)流(りゅう)石(せき)名(な) 医(い)の(の)良(よし) 創(さ)と(と)と(と)僅(わずか) の(の)肉(にく)不(ふ)快(かい)な(な)よ 取(と)り(り)白(しろ)き(き)物(もの)の(の)毒(どく) と(と)し(し)る(る)け(け)中(ちゆう)小(こ)ま(ま) 眼(がん)痛(いた)き(き)自(じ)由(ゆう)不(ふ)歩(ほ)り(り)の(の) 出(い)来(き)る(る)と(と)の(の)熱(ねつ)心(こゝろ)の(の)中(ちゆう)の(の)恨(うら)み ば(ば)あ(あ)る(る)上(うへ)肌(は)へ(へ)と(と)通(と)る(る)を(を)風(かぜ) 小(こ)舟(ふね)内(うち)の(の)水(みづ)の(の)幼(わか)子(こ)が(が)ほ(ほ)と(と) ⊠

東(あづま) 来(き) 近(ちか)い(い)と(と) 一(いち)階(かい)の(の) 内(うち) 二(に)階(かい)の(の) 家(いえ) の(の) 入(い)る(る) 家(いえ) へ(へ) 入(い)る(る)

石(いし) 齋(さい)

いさぎよしの下や... 橋を渡る... 二人の姿が... 霧の夜...



あつ。... 雨の... 橋を渡る... 二人の姿が... 霧の夜...



つゝ顔と縁と... 又後流... 又上門... 上門の内に入る... 武田交來錄... 近刻揚洲周延画

倭洋妾横濱美談

三冊を切 武田交來錄 近刻揚洲周延画

造回ハ現今横濱在留の英人何其カ暗小兩個の妾と寵愛薄劣... とうとうみて竊小私怨とふくを屢々奸計をめぐらし無実の罪小陥... 多く苛酷の呵責も仕女の忠義と天の惠賜小迅速白日小青天と持... 汚名りそれ仇と恩もて報ひし開港以來未曾有の珍聞美談... 賞賛をす世説の俗と一小冊おつるた勸善の物づつるたり

御届明治十三年九月十三日

東京書肆

深川区西元町八番地 編輯人 武田勝次郎 神田区塗師町二番地 出版人 船津忠治郎

錦書堂藏

霜夜鐘十字过笮第四編

大華

出用



3223
59



Handwritten red marks, possibly a date or initials.



Red stamp containing the number 3223 and the number 59 below it.